

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

我が国における鳳凰とその図像：
中国文化受容の一形態

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1991-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/721

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



我が国における鳳凰とその図像

— 中国文化受容の一形態 —

高橋宗一

I

日本文化の形成過程における特質の一つとして、外来の文化を貧欲なままでに取り入れ、消化・吸収していくことが指摘できよう。たとえば、現在、われわれが使用している「漢字」は、その「漢」の文字が示すように、古代中国の王朝名の一つであり、また広義的に中国をさすときに用いられる「漢」という国、つまり中国で、つくりだされ使われてきた文字である。我が国はこの「漢」の国の「字」、すなわち「漢字」を輸入して、日本語の表記に利用し、日本文化形成の一助としてきたのである。

しかし日本は、中国文化がつくりだした「漢字」を消化・吸収した

だけでなく、「漢字」からいわゆる「ひらがな」や「カタカナ」とよばれる「仮名」を発明し、「漢字」による言語表記のほかに「仮名」による表記をつくりだすに至った。この「仮名」による言語表記は、「漢字」の発祥の地である中国にはなく、日本独自のものである。つまり、中国では、言語表記（中国語の表記）は「漢字」による表記だけで事足りていたのであるが、日本では、日本語を表記するにあたり、中国からの借物である「漢字」だけでは不自由さがあり、「漢字」以外のものによる表記を必要とし、「仮名」をつくりだして、日本語の表記を補ったのである。

このことは、日本文化の形成過程を考える上で、重要な一面として捉えることができる。日本の文化は、外来の文化を取り入れ、それを消化・吸収したあとに、さらに発展させて、あらたに独自のものをつくりだしていく。このような文化形成の過程を経て、日本の文化は一

段と豊潤なものへと成長してきたのである。

本論では、我が国がひとたび取り入れた外来の文化をどのよう
に受け止めてきたかという問題を、特に中国文化の受容という点から考
えたい。古代中国で考えだされ、つくりだされた「鳳凰」という想像上
の鳥をとりあげ、「鳳凰」がどのようなようにして日本に受け入れられてき
たのかを、言葉や概念としてだけではなく、中国文化の影響を強く受
けた上代美術にみられる「鳳凰」の図像からも考えていきたい。

II

現在われわれ日本人は、鳳凰を一体どのような鳥と認識しているの
であろうか。まず、この点から確認してみたい。

現在我が国で、「国民的国語辞典」として多くの人から信頼の置か
れている『広辞苑』（第三版 新村出編 岩波書店）の「鳳凰」の項
には、次のように説明がなされている。

古来中国で、麟（りん）・亀・竜と共に四瑞として尊ばれた想像上
の瑞鳥。形は前は麟、後は鹿、頸は蛇、尾は魚、背は亀、頷（あ
ご）は燕、嘴は鶏に似、五色絢爛（けんらん）、声は五音に中り、
梧桐に宿り、竹実を食い、醴泉（れいせん）を飲むといひ、聖徳
の天子の兆として現われると伝えられる。雄を鳳、雌を凰とい
う。鳳鳥。

次いで、日本が漢和辞典として世界に誇り得る『大漢和辞典』（諸

橋轍次著 大修館書店）をみると、「鳳」の項（鳥部三画）の「鳳凰」
に以下の解説がある。

鳥の名。聖王が出ると現れるといふ瑞鳥。雄を鳳といひ、雌を凰
といふ。身に五色の文彩があり、鳥類の首長であるといふ。鳳
皇。

さらにこの解説には「鳳凰」の図として、中国・清朝康熙年間（一
六六二〜一七二二）に勅撰された類書『古今圖書集成』の「鳳凰図」
を掲載している（図1）。

また『大漢和辞典』の「鳳」の文字解説によると、「鳳」は「鳳凰」
のことであり、「鳳」の一字でもって「鳳凰」を意味することがある
とわかる。ちなみに『大漢和辞典』の「鳳」の項目には二百五十六の
語彙があげられているが、多くの場合、「鳳」の一字で「鳳凰」を



図1 鳳凰（古今圖書集成）

意味している。

以上、『広辞苑』や『大漢和辞典』から、「鳳凰」という鳥についての説明の要点をまとめてみると、次の四点になろう。

- ① 中国古来の想像上の瑞鳥・鳥類の首長
- ② 形態的な特徴
- ③ 付随している特性
- ④ 名称・呼称

しかし、「鳳凰」の説明を、『広辞苑』や『大漢和辞典』の両書がともに、「……といい」「……と伝えられる」「……という」「……といひ」「……といふ」などの伝聞表現をとっている点に注意したい。「鳳凰」について説明する時に、なぜ我が国においてはこのような伝聞的な言い回しをしているのか。それはおそらく、「鳳凰」という鳥が日本独自の鳥ではなく、中国の鳥、さらには想像上の鳥ということに起因し、中国での「鳳凰」に対する定義に基づき、それを流用せざるをえないからであろう。

このことは、現代からやや時代を下って、江戸時代の図解大百科辞典『倭漢三才圖會』（寺島良安撰 一七一八年刊）の解説をみるとよく理解できる。『倭漢三才圖會』の「卷第四十四 山禽類 鳳凰」の項には、次のような説明がなされている。

『本綱』ニ、鳳凰ハ、状チ鴻ノ前、麟ノ後シロ、燕ノ頷、雞ノ喙シ、蛇ノ頸、魚ノ尾、鶴ノ頰、鴛ノ頤、龍ノ文、龜ノ背、羽ニ五采ヲ備フ。高サ四・五尺、四海ニ翱翔ス。天下ニ道アルトキハ、則チ見ハル。其ノ翼筭ノゴトク、其ノ聲簫ノゴトシ。生蟲ヲ啄マ

ズ、生草ヲ折ラズ、羣居セズ、侶行セズ。梧桐ニアラザレバ棲マズ、竹實ニアラザレバ食ハズ、醴泉ニアラザレバ飲マズ、其ノ鳴クコト五音ニ中ル。飛ブトキハ、則チ羣鳥之ニ從フ。雄ヲ鳳ト為シ、雌ヲ凰ト為ス。天ニ在リテハ朱雀ト為ル。羽アル蟲三百六十二ニシテ、鳳之ガ長ト為ル。故ニ字凡ニ從フ。凡ハ總也。其ノ種四ツアリ。赤多キ者ハ鳳ナリ。青多キモノハ鸞ナリ。黄多キ者ハ鶩ナリ。紫多キ者は鸞鷟ナリ。白多キ者ハ鸞鷟ナリ。（割註 又雁ノ属ニ鸞鷟ト曰フ者アリ。此ト同名ニシテ異也。）南思州・北甘山ハ壁ヲ千仞立タルゴトシ。猿狖モ至ルコト能ハズ。鳳凰其ノ上ニ巢クフ。惟ダ蟲魚ヲ食フ。大雨ニ遇ヘバ、飄ヘリ墮ツ。其ノ雛小キ者、猶ホ鶴ノゴトキモ、足差短シ。鳳凰脚ノ下ニ、白キ物アリ。石ノゴトクナル者ナリ。鳳凰臺ト名ツク。其ノ味辛平ナリ。鳳凰鳥ト雖モ、時ニ或ハ來儀ス。其ノ棲ミ止マル處ヲ候ヒテ、土ヲ掘ルコト二・三尺ニシテ、之ヲ取ル。状チ圓キ石ノゴトシ。白クシテ卵ニ似タル者、是也。今鳳アル處、未ダ必ズシモ竹アラズ、竹アル處、未ダ必シモ鳳アラズ。

（原文は漢文訓読）



図2 鳳凰（倭漢三才図絵）

この『倭漢三才圖會』による「鳳凰」の説明には、前述した四つの要点のほか、「鳳凰」の種類や生息地などの解説が加えられ、また「鳳凰」の図も挿入されている(図2)。現代の『広辞苑』や『大漢和辞典』の解説にくらべると、「鳳凰」についての情報をより多く提供しているといえよう。

しかし、この説明は、中国・明朝の李時珍が撰述した『本草綱目』およびその集解の諸説の中から適宜引用するにとどまっておらず、『倭漢三才圖會』は「本綱」としてひとまとめに記述している)、我が国の「鳳凰」に対する認識は、中国での「鳳凰」の見解をそのまま受け入れたにすぎないことがわかる。つまり、我が国が、中国でなされている説明だけで、「鳳凰」という鳥について理解していることを『倭漢三才圖會』の説明は、如実に示してくれているのである。

III

では「鳳凰」をつくりだした中国では、「鳳凰」はどのようにして捉えられてきたのであろうか。

中国における「鳳凰」については、出石誠彦氏の論考があり、中国の文献にみえる「鳳凰」の記事を検討して、「鳳凰」の由来を明らかにしたが(註1)、「鳳凰」は次のように捉えられてきたといえる。

「鳳凰」に関する記述は、古くは中国最古の詩の総集で周初から春秋のなかごろまで(紀元前一一〇〇年ごろ～紀元前六〇〇ごろ)の詩

を集めている『詩経』、孔子が刪定した中国古代王朝の虞・夏・商・周の政道を記す『書経』、『春秋』(孔子が筆刪した魯の国の記録)の注釈書『春秋左氏傳』などにみえている(註2)。しかし、これらの記事からは、「鳳凰」はただ普通らしからぬ立派な鳥、単なる珍奇な鳥というぐらゐの意味にしかとれない。つまり、この時代にはまだ、「鳳凰」を、「鳳凰」第一の性質といえる祥瑞には結びつけていなかったようである。

ところが、戦国末から漢代になるに及んで、「鳳凰」が普通でない立派な鳥、珍しく美しい鳥ということで、めでたいしるし(祥瑞)とされ、「鳳凰」に祥瑞の思想が加えられるようになったらしい。それは、『淮南子』(前漢の淮南王劉安の撰)や『史記』(漢の司馬遷の撰)などの漢代の記録に、「鳳凰」は明瞭に祥瑞とされていることからわかる(註3)。すなわち、この時期あたりから「鳳凰」は瑞鳥と考えられるようになったのである。さらに祥瑞は、情深い君主(仁君)が優れた政治(聖政)をおこなったときにあつて現れることもあつて、「鳳凰」は仁鳥とされ、世の中が太平になれば現れる鳥と思われるようになつたのであろう。加えて、仁君が生成を愛で、殺伐を憎むことを本質とすることから、「鳳凰」に仁君の本質をも属性として加えられるに至り、「鳳凰」は、生きている虫や魚を食わず、草木を倒さない鳥と考えられていったらしい。

このようにして、「鳳凰」という鳥は、次第に付随する性質を豊かにしていくことになつた。その結果、鳥類(羽族)のなかで、「鳳凰」に比類するべきものがなくなり、羽族の長とされ、群鳥を従えたと伝

えられるようにもなったのである。

なお、「鳳凰」が梧桐に棲み、竹の実を食べると梧桐竹実に結び付けられているのは、『詩経』のなかで「鳳凰」と梧桐が関係づけられていることや（註4）、普通にできない珍しい竹の実を、同様に稀に現れる鳥と考えていた「鳳凰」に関係づけたためであろう。

以上のように、中国では「鳳凰」を捉えてきたのである。

では、このような性格をもつ鳥として考えられてきた「鳳凰」はどのような姿をした鳥と思われていたのであろうか。

ここで「鳳凰」の形態についてみていきたいと思う。

永元十一年（一〇〇）に成立し、中国における漢字の基本的な古典として有名な『説文解字』（後漢の許慎の撰、以下『説文』という）には、「鳳凰」の形態が次のように記されている。

鴻前、鸞後、蛇頸、魚尾、鸞頰、鴛頤、龍文、虎背、燕頤、雞喙、五色備舉。

『説文』の説明によると、「鳳凰」の姿は、体のいわば上半身はおおとり（鴻）の体で、下半身は麒麟（中国の想像上の動物で、鹿に似た体つきとされる）の雌（鸞）のものである。体の各部分については、首のあたりは蛇の首、尾羽根は魚の尾、頤はこうのとりの（鸞）の頤、したあと（頤）はおしどり（鴛）のもの、体の模様（文様）は龍のもの、背中は虎の背、耳の下あたり（頤）は燕のもの、くちばしは鶏のものである。さらに体全身の羽毛は五色（黄・青・赤・白・黒）に彩られていることになる。

このように『説文』の説明からわかる「鳳凰」の形態は、「鳳凰」が想像上の鳥であるために、実際に認識されているさまざまな鳥や動物の一部分を寄せ集めて、つくりだされたものということになる。つまり、古代中国で架空の存在としてつくりだした「鳳凰」という鳥の姿は、各種動物の合成体として考えられていたのである。なお、このような合成法によって、想像上・空想上の動物をつくりだすことは、古代中国人の常套手段だったという（註5）。

さて、古代中国で瑞鳥として考えだされた「鳳凰」は、その姿も各種動物合成体として考えられていくことになったのだが、『説文』にみられる記述などによって、より広く中国各地に知られることになったであろう。そして、このように「鳳凰」の形態がひとたび定義されてしまうと、瑞鳥である「鳳凰」は中国で共通の認識として捉えられていったと思われる。しかし、『説文』以後記された中国の文献などをみると、必ずしもそうではなかったように思える点もある。記述した人の記憶違いや誤植によるものかもしれないが、若干の相違や省略がみられる。

たとえば、三世紀前半、魏の張揖が撰した『広雅』には、

鶏頭、燕頤、蛇頸、鴻身、魚尾、駢翼。

とあり、鶏の頭部に、燕の頤がつき、蛇の頸に、鴻の胴体をして、魚の尾をもち、助骨が連なって一枚の板のようにみえる力強そうな翼のある鳥、それが「鳳凰」であるとす。

また、周末から漢代にかけて完成していったとされる中国最古の字書『爾雅』に、四世紀の初めごろ活躍した晋の郭璞がつけた註には、

鶏頭、蛇頸、燕頤、龜背、魚尾、五彩色、高六尺許。

とある。つまり、「鳳凰」は、頭は鶏の頭、首は蛇の首、頤（あご）は燕の頤、背中龜龜の背中、尾は魚の尾、五彩からなる色合いの鳥で高さが六尺ほどあるという。

さらに成立は『説文』よりも古いが、一度失散して宋代に曾鞏（一〇一九〜一〇八三）が復元した『説苑』（漢の劉向の撰）には、
鴻前麒麟後、蛇頸魚尾、鶴植鴛頸、龍文龜背、燕喙雞喙、駢翼。
とあり、

十世紀の終わりに編纂された『太平御覧』に所収されている『韓詩外伝』（漢の漢嬰の撰）の佚文に、

鴻前而麟後、蛇頸而魚尾、鶴頸而鴛頸、龍文而龜背、燕頤而鶏喙。
とある。同様の記事は、十二世紀に完成した『爾雅翼』（宋の羅願の撰）にも引かれている。

このほか、さまざまな書籍に引用されている「鳳凰」の形態の記事には、次のようなものがある。

鶏頭、燕喙、蛇頸、龍形、麟翼、魚尾、五彩。

『葉叶圖』（『太平御覧』所収）

鶏頭、燕喙、龜頸、龍形、麟翼、魚尾、其状如鶴、體備五色。

『帝王世紀』（『太平御覧』『初学記』所収）

允鶏喙而燕頤、頸蛇蜿而龍文、鶏峙鴻前。

「顧愷之鳳賦」（『淵鑑類函』所収）

蛇頭、燕頤、龜背、鼈腹、鶴頸、鶏喙、鴻前、魚尾、青首、駢翼、鷺立而鴛鴦思。
『宋書』符瑞志

ここで、中国の各種文献に記された「鳳凰」の形態を比較してみるために、表をつくり、その異同をみてみよう（註6）。

この表は、前掲の九種類文献の文献に記された「鳳凰」の形態について、説明されている部分を、〈頭部・くちばし〉〈下あご〉〈首〉〈体の文様〉〈尾羽根〉〈体の形〉〈背中〉〈翼〉〈その他〉とに分けてみた。〈その他〉には、あまり比較されていない部分や色彩などを入れておくことにした。

この表をみて、まず気がつくのは、まったく同じ記事がないこととすべての項目を網羅する記事がないことである。この九種類文献に記された「鳳凰」の形態は、みな一見同じような記述なのだが、少しずつ違いがみられる。

では、形態の部分ごとに表をみていこう。

〈頭部・くちばし〉

頭部については、『宋書』を除けば、みな鶏にたとえている。

くちばしは鶏もしくは燕だが、頭部について記していないもの（『説文』・『韓詩外伝』・『顧愷之鳳賦』）は「鶏喙」とする。また、くちばしについて触れずに、頭部とくちばしとをいっしょに表現

した場合（『広雅』・『爾雅郭註』）は「鶏頭」としている。

〈下あご〉

下あごの多くは「燕頤」とある。ただし、下あごについての説明のないものもある（『説苑』・『葉叶圖』・『帝王世紀』）。これらはいくちばしの説明を「燕喙」としたこと、下あごについては省略したか、燕のたとえを使えなかったためであろう。

	諸書に掲載された「鳳凰」の形状							
『説文解字』	雞喙	燕頤	蛇頸	龍文	魚尾	鴻前嚙後	虎背	鶴頤・鴛頤・五色
『広雅』	雞頭	燕頤	蛇頸		魚尾	鴻身	骍翼	
『爾雅』郭璞註	雞頭	燕頤	蛇頸		魚尾		龜背	五彩色・高六尺許
『説苑』	雞喙		蛇頸	龍文	魚尾	鴻前嚙後	龜背	鶴植・鴛頤
『韓詩外伝』	雞喙	燕頤	蛇頸	龍文	魚尾	鴻前嚙後	龜背	鶴頤・鴛頤
『楽叶圖』	雞頭燕喙		蛇頸	龍形	魚尾			五彩
『帝王世紀』	雞頭燕喙		龜頸	龍形	魚尾	其状如鶴		五色
『顧愷之鳳賦』	雞喙	燕頤	蛇頸	龍文	鴻前	鴻前		
『宋書』符瑞志	蛇頭雞喙	燕頤	鶴頸		魚尾	鴻前	龜背	駢翼
								鼈腹・青首

〈首〉

首は、ほぼみな蛇の首とするが、龜としたり（『帝王世紀』）、鶴（『宋書』）とするものもある。蛇の首とすると、細長くまがりくねった首を想像させる。

〈体の文様〉

説明のないものもあるが、龍の文様とするものが多く、羽毛が鱗状に見えるのか。

〈尾羽根〉

尾羽根については、ほとんど「魚尾」としており、魚の尾のよう

〈体の形〉

に二つに分かれたものなのであろう。

体の形については、「鳳凰」は鳥であるから、おとりのようであつたり（『広雅』）、鶴に似ている（『帝王世紀』）という説明もあるが、前半分がおとりの体で、後ろ半分が麒麟の体と全身を二つに分けるのが基本のようである。「鴻前」と前半分だけの説明しかされていないものもある（『顧愷之鳳賦』・『宋書』）。

〈背中〉

背中については、記していないものも多いが、龜の背中とするも

のがある（『爾雅郭註』・『說苑』・『韓詩外伝』・『宋書』）。そうだとすると、甲羅をつけた固い背中と考えていたのだろうか。『説文』は、虎の背中としている。

〈翼〉

「鳳凰」は鳥であるから、当然翼をもっているので、説明のないものもあるが、麒麟の翼（『楽叶圖』・『帝王世紀』）、一枚の板状の翼（『広雅』・『宋書』）と、羽族の長として力強く羽ばたくものと、考えていたようである。

〈その他〉

前述以外の「鳳凰」の形態としては、五色の羽毛をもつこと（『説文』・『爾雅郭註』・『楽叶圖』・『帝王世紀』）があげられる。また、「鳳凰」の額がこうのとりの額と頭部をより詳しく説明し、耳から下のあたりにおしどりの鰓（えら）があると説明するものもある（『説文』・『韓詩外伝』）。また、すっぽんの腹に青い首をしているという説明もある（『宋書』）。

以上のように、「鳳凰」の形態を各部分ごとに各種文献を比較しながらみたことで、細部の相違が確認でき、さらに「鳳凰」基本形態とも言えるべき姿がわかったのではないかと思う。

「鳳凰」の基本形態は、鶏のような頭に、燕のような下あごで、首は蛇のように細長く、龍の鱗のようにみえる五色の羽毛で、魚のように二つに分かれた尾をもち、翼は一枚板のように強い大きな鳥ということになる。

ではどうして「鳳凰」の形態が決められることになったのか。「鳳

凰」は本来実在しない空想上の鳥であるから、その形態はどのように想定してもよかつたはずである。

その理由は、「鳳凰」が瑞鳥と考えられるようになる、その形態を定めなければならなくなったからであろう。「鳳凰」の出現が、祥瑞として捉えられるようになれば、「鳳凰」それ自身が世の中に大きな影響を与えることになりかねない。実際には「鳳凰」という鳥はないのだから、誰も「鳳凰」の姿をみたことはない。しかし、「鳳凰」が天下太平なる世の中に現れると考えられるようになると、世の中を治めるひと、つまり君主が自分の行っている政治の状況をよく見せるために、「鳳凰」を利用することもあつたと思われる。今よい治世が行われていることの証として「鳳凰」が現れたとしたり、今までの世の中は悪かつたが、これからはいい時代がやって来ると民衆に期待を抱かせるために、「鳳凰」出現の祥瑞を使うことがあつたであろう。このようなことから、想像上の鳥といつても一応はその姿を決めておく必要があつたと考えられる。姿かたちのわからないものであつては、具合が悪いのである。しかし、「鳳凰」は頻繁に現れる鳥ではないので、実際によく見かけるような鳥に似ていては困る。そうかと言つて、誰にも想像できないような鳥であつても困るのである。そこで、誰もが「鳳凰」の姿を思い浮べることができるように、いろいろな鳥・動物を組み合わせた形態をつくりだしたのではなからうか。それが先にみた「鳳凰」の基本形態なのであろう。

IV

中国で前述のようにその形態が定められた瑞鳥「鳳凰」が、我が国にも伝えられているのである。

では、「鳳凰」は、いつ、どこから、どのようにして伝えられたのであろうか。残念ながら、この問いに対して明確な答えを用意することはできない。

瑞鳥「鳳凰」を生みだした中国文化は、この場合は漢民族の文化とといったほうが適切であるが、長い中国の歴史の中で育成されてきたものである。その文化は、中国国内だけにとどまらず、近隣諸国に少なからざる影響を与えてきた。日本もその例外ではないことは、先に述べた「漢字」のことで明らかである。また、日本だけでなく、朝鮮半島の国々においても中国文化の影響は認められ、中国文化を自国の文化に融合させてきた。我が国は、遣隋使や遣唐使の派遣によって、中国文化を直接中国から取り入れたこともあるが、それ以前に朝鮮半島の国々との交流の中から中国文化の一端を享受していたことも忘れてはならない。「漢字」などは、中国と直接交渉をもつ以前に朝鮮半島の国々から伝えられたものである。

「鳳凰」も、その巨大な中国文化の影響力を背景にして、我が国を知るところとなったのである。その一例をあげるならば、「鳳凰」の形態を記した書物が日本に請来されていることがあげられよう。九世

紀の終わりごろに、藤原佐世が勅命を奉じて編纂した『日本国見在書目録』をみると、『説文』・『爾雅郭註』・『広雅』・『説苑』・『韓詩外伝』・『帝王世紀』など「鳳凰」の形態を記したものを始め、我が国に多くの漢籍が伝来されていたことがわかる。これらの書籍を通じて、我が国は「鳳凰」のなんたるかを知り得たはずである。しかし、これらの漢籍のうち、いかなる書がいつ日本にもたらされたかということは、詳しくは明らかにすることはできない。ただ『古事記』・『日本書紀』・『万葉集』など八世紀に撰述された諸書の内容によって、既に多数の漢籍が伝来していたことがわかる。さらに、現在失われて詳細不明ではあるが、我が国における辞書の起源と見られる『新字』（四十四巻）が、六八二年に撰集されていることから、その当時多くの漢籍が将来されておき、我が国の知識人に活用されていたと思われる。

これらのことを考え合わせると、日本でも「鳳凰」について割と早い時期から知っていたと思われる。たとえば、『日本書紀』孝徳天皇白雉元年（六五〇）二月戊寅（九日）条にみられる詔の中に、「所謂、鳳凰・麒麟・白雉・白鳥、若斯鳥獸、及于草木、有符應者、皆是、天地所生、休祥嘉瑞也。」と、鳳凰が祥瑞として考えられている記事がある。また『続日本紀』文武天皇慶雲元年（七〇四）十一月庚寅（八日）条に、「遣從五位上忌部宿禰子首、供幣帛、鳳凰鏡、果子錦于伊勢大神宮。」と、「鳳凰鏡」なるものが伊勢大神宮にそなえられている記事がみえる。「鳳凰鏡」がどのようなものであるかははっきりしないが、おそらく鏡の背に「鳳凰」の姿が表されているものであろう。さらに、平安初期に編纂された法令集の『延喜式』卷二十一・治部省

祥瑞の項には、「鳳（割註）状如鶴。五綵以文。鷄冠鸞喙蛇頭龍形」とあり、「鳳凰」の形態の記述もみられる。

このように我が国で書かれた書物にも「鳳凰」のことが記されていることが確認できる。

しかし、我が国に伝わる「鳳凰」には、書籍に文字で記された「鳳凰」だけではなく、上代美術作品のなかに、「鳳凰」の姿を図像として描いているものがみられる。無論その「鳳凰」の図も、中国文化の伝播によって描かれたものであるが、我が国に残る「鳳凰」図像を次にみていきたい。

日本の上代美術作品に描かれた「鳳凰」図像で、古いものは、六世紀後半から七世紀までにつくられたと推定されている古墳からの出土

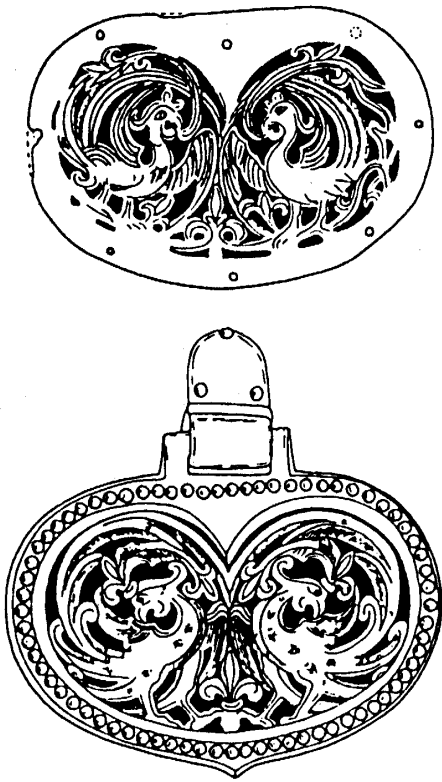


図3 心葉形杏葉・鳳凰
(上・神宮徴古館 下・珠城山3号墳)

(三二)

品の中にみられる。現在一番古い「鳳凰」図像と考えられているのは、伊勢の神宮徴古所蔵の杏葉（出土地不明）であるが（註7）、この杏葉には文様板に透かし彫りで二つの「鳳凰」が向かい合わせに表されている（図3）。また、珠城山三号墳（奈良県桜井市）からは、頭部を後ろに向けた二羽の「鳳凰」の図柄を透かし彫りした杏葉が出土している（註8・図3）。これらの杏葉はともに「双鳳文透彫杏葉」と呼ばれる心葉形杏葉である。心葉形杏葉に描かれる「鳳凰」は、その杏葉の文様板の形に制約されて、ほぼ円形をした空間に左右の翼を上方に持ちあげ、尾羽根を後方から弧を描くようにして前方の頭部近くにのぼしている。

奈良斑鳩の法隆寺近くにある藤ノ木古墳からは、数多くの馬具類が

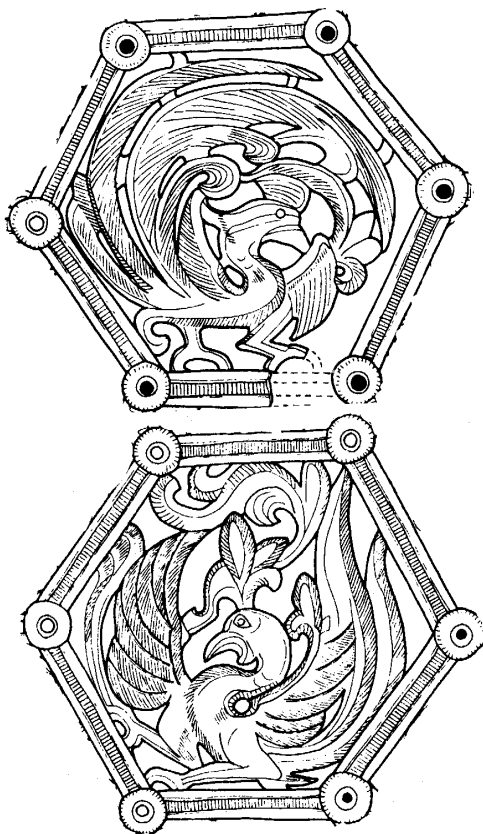


図4 鞍金具・鳳凰（藤ノ木古墳）



図5 棘葉形杏葉・鳳凰（藤ノ木古墳）

出土しているが、その出土品の中に「鳳凰」の図像がいくつかみられる（註9）。鞍金具や棘葉形杏葉などに透かし彫りで「鳳凰」があらわされている。鞍金具の「鳳凰」は、亀甲の形の中に描かれており、左右に翼をひろげ、尾羽根を高く跳ね上げる（図4）。棘葉形杏葉の「鳳凰」は、向かい合った「鳳凰」がともに翼を広げ、尾羽根を上方にあげている（図5）。

古墳出土の「鳳凰」図像に共通する点は、翼を左右に広げ、尾羽根を高くあげているところにある。これらの古墳出土品にみられる「鳳凰」は、必ずしも我が国でつくられたものとは限らず、朝鮮半島からの舶載品とも考えられるが、我が国に知られていた「鳳凰」であることには違いない（註10）。



図6 天寿国繡帳・鳳凰

次に、描かれた年代がほぼ確認できる「鳳凰」図像の中で一番古いものをみてみよう。

それは、奈良法隆寺の隣にある中宮寺に伝蔵されている天寿国繡帳にみられる「鳳凰」である（図6）。天寿国繡帳は、その繡帳銘により、推古三十年（六二二）二月二十二日になくなった聖徳太子の死を嘆き悲しんだ太子妃の橘大女郎の願いから、推古天皇の命によりつく

られた刺繡された帳であることがわかる(註11)。しかし現存の天寿国繡帳は、鎌倉時代に一度復元されたものの長い月日のために原形をうかがうこともできないような断片と化したために、わずかに残る刺繡された図柄を九〇センチ四方の地張り裂に貼り合わせたものとなっている。「鳳凰」の図像もその断片のひとつなのだが、幸運にも当初つくられた繡帳の断片であることが確認されている(註12)。つまり、現在の天寿国繡帳にある「鳳凰」は、推古三十年(六二二)の聖徳太子死後、あまり年をへだてない頃に描かれたことになる。さらに繡帳銘によると、刺繡の下図を描いた人物の名もわかる。このように制作の事情がわかる「鳳凰」図像も珍しい。

天寿国繡帳の「鳳凰」は、半パルメットをくわえ左方向に飛翔する



図7 法隆寺金堂天蓋・鳳凰

姿に描かれている。頭部・背中・脚・尾羽根は赤い糸で刺繡され、胸から腹にかけては淡黄色に、翼は赤・淡黄・緑三色の糸で色分けされている。五色の色を使用してはいないが、「鳳凰」の形態の各部分を色分けして表現している「鳳凰」である。

この他に、七世紀中につくられた「鳳凰」図像には、次のものがあげられる。〈法隆寺金堂天蓋木造鳳凰像 図7〉・〈法隆寺玉虫厨子鳳凰像 図8〉・〈南法華寺鳳凰文磚 図9〉・〈法隆寺木造光背鳳凰像 図10〉などである。

〈法隆寺金堂天蓋木造鳳凰像〉は、法隆寺の金堂に懸けられた天蓋に取付けられている。長さ三三センチメートル、高さ一七センチメートルほどの大きさで、頭・体部を樟の一枚から彫り、翼や足は別にくくり、つけあわせている。色彩の剝落は著しいが、朱・緑青・墨の毛描きなどが残るところもある。頭部を引き上げて胸を張り、両足を前方に伸ばし、翼は後方にたなびき、尾羽根をやや上方にあげる姿勢をとっている。

〈法隆寺玉虫厨子鳳凰像〉は、法隆寺にある玉虫厨子と呼ばれる宮殿形の厨子の宮殿部背面に描かれている。頭部を上げ、翼を大きく左右に広げ、尾羽根を後方にゆったりとS字形にたなびかせ、画面右上方から降り来たるさまに描く。

〈南法華寺鳳凰文磚〉は、奈良岡寺出土と伝えられる、一辺三九センチメートル、厚さ八センチメートルの磚で、ここにみられる「鳳凰」は、右向きに半肉に表出されている。この「鳳凰」は両翼を広げ、尾翼を巻き上げて直立する様に表されている。



図8 法隆寺玉虫厨子・鳳凰



図9 南法華寺鳳凰文磚



図10 法隆寺光背・鳳凰

〈法隆寺木造光背鳳凰〉は、法隆寺宝蔵殿所在の旧綱封蔵弥勒菩薩坐像に附属する光背の背面に乾漆盛上げて浮彫りされている。半肉浮彫りのこの「鳳凰」は、大きく羽を広げ、尾羽根を後方にはねあげ、足を前後に勢いよく踏張つて蓮台に立つ。首をC字形に曲げ、頭部を下方に向け、口に綬帯を含む。

七世紀ごろにつくられ、現存している「鳳凰」図像をみてきたが、それらはみな、仏像美術に係するものに描かれている。我が国の仏教美術は、仏教が六世紀ごろに伝来した後、仏教の広がりとともに盛んになっていった。その隆盛のなかで「鳳凰」の図像も描かれることになったのだが、「鳳凰」は本来仏教とは関係のないものであるが、「鳳凰」のもつ祥瑞といっためでたさや中国の神仙思想における「鳳

凰」の役割などを仏教が取り込んで利用したことと思われる(註13)。八世紀に入ると、我が国は、中国を手本とした律令国家の整備に一層の充実を図るようになるが、それと同時に中国文化に対しても、これまで以上に傾倒していくことになった。その結果、「鳳凰」図像も数多く制作されたと思われる、今に伝わるものも少なくない。いろいろな美術作品に描かれた「鳳凰」をみることができる。

東大寺に伝わる花鳥彩絵油色箱の側面には、飛翔する「鳳凰」の姿が認められる(図11)。黒漆地に描かれた「鳳凰」は、頭部の鶏冠、翼、尾翼に朱が映えている。なお、首には「尺木」と呼ばれる宝珠のような形をしたものが付けられている。「尺木」は、本来、龍が天に昇るときに必要なものとして考えだされたが、のちに「鳳凰」にも付

けられるようになったという(註14)。

また、正倉院に残る宝物の中にも「鳳凰」の姿を描いたものがある。その中からいくつかみていきたい。

〈鳳凰文御冠残欠・鳳凰 図12〉

この「鳳凰」は、『礼冠礼服目錄断簡』(『大日本古文书』第二十五卷附録)によると、光明皇后の御冠を飾ったことが知られる。金板を打ち出して薄肉彫りにした「鳳凰」で、羽毛や目などの細部に毛彫りが加えられている。両翼の付け根に丸形の座をつくるが、当初は玉が嵌められていたと思われる。右脚を欠失しているが、体全体をS字形に曲げ、翼を大きく広げて、尾翼を巻き上げる姿勢をとる。これと同様のものがもう一つあり、それは頭部・尾部・脚部を欠しているが、

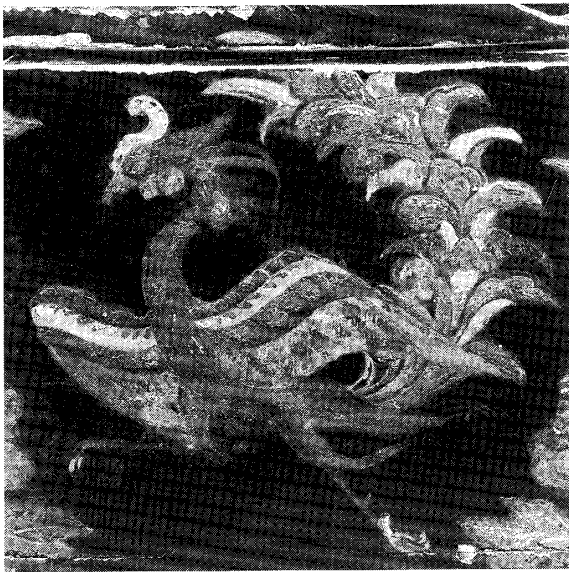


図11 花鳥彩絵油色箱・鳳凰



図12 御冠残欠・鳳凰



図13 紫地鳳形錦御軾・鳳凰

二つの「鳳凰」の首の向き、翼の位置から考えると、向き合う形になるので、対をなす「鳳凰」と思われる。

〈紫地鳳形錦御軾・鳳凰 図13〉

「紫地鳳形錦御軾」は正倉院宝物の献納目錄の一つである『国家珍宝帳』に、「御軾二枚、一枚紫地鳳形錦、一枚長斑錦」と記されている二枚中の前者にあたる軾(ひじつき)である。この軾に貼られた錦に、「鳳凰」は織り込まれている。黄・白・淡緑・赤の糸を織り混ぜて、飛翔する「鳳凰」の姿をつくりだしている。

〈鳥獸花背八角鏡・鳳凰 図14〉

この「鳳凰」は、『国家珍宝帳』に「八角鏡一面、重十三斤十五兩、径一尺四寸五分半、鳥獸花背、緋纒帶、八角椗匣盛」とあるものと思



図14 鳥獸花背八角鏡・鳳凰

われる鏡の背に、紐をはさんで左右にあり、向かい合う。綬帯を銜えて、片足で雲をつかむ。「鳳凰」は空高く飛翔するから、周辺に雲を描くことが多いが、この「鳳凰」は、雲に乗る「鳳凰」といえる(註15)。

〈蘇芳地金銀絵箱・鳳凰 図15〉

「蘇芳地金銀絵箱」と呼ばれる木箱の底裏にみられる「鳳凰」である。蘇芳(黒みをおびた赤色)をかけた地に金泥でもって、綬帯を含み飛翔する様に描かれる。頭部の描写をみると、細部にわたって一つの線をもおろそかにせず書き込み、風に舞う羽毛の一本一本に注意を払っていることがみとれる。さらに「鳳凰」の周囲に銀泥の飛雲と金泥の蝶鳥とを配した生動を帯びた図案から、速筆のうちに当代画工の



図15 蘇芳地金銀絵箱・鳳凰

優れた技倆の一端をうかがいしることができる。

〈花喰鳥刺繡残片・鳳凰 図16〉

唐花文の上に片足で立ち、嘴に花をくわえた「鳳凰」が見返りの姿で表されている。両翼を左右にひろげ、尾翼を高くはねあげている。この「鳳凰」は、紫・赤・白・薄白茶・茶紫・黄など多色の繡糸を用いて描かれる。赤以外はうんげんの濃淡とし、さらに輪郭や嘴には金糸、胸飾りには金糸・銀糸を用いて、輝くばかりの美しさを醸しだしている。

まだこの他の正倉院宝物にも「鳳凰」の図像が描かれており、「金銀平脱背八角鏡」・「鳥獸花背円鏡」・「金銀平脱皮箱」・「金銅鳳凰形裁文」などに「鳳凰」図像が認められる。

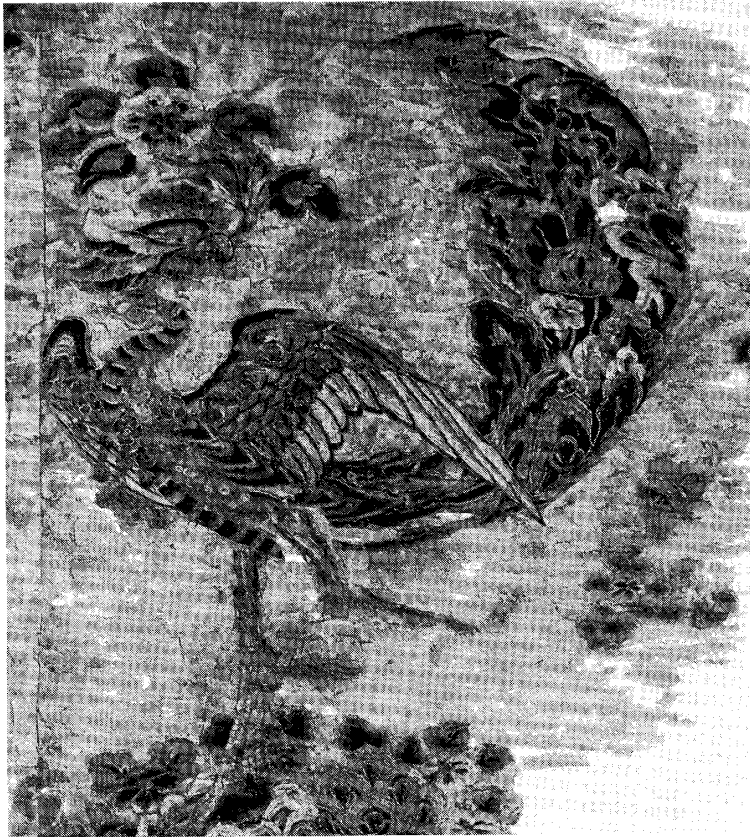


図16 花喰鳥刺繡残片・鳳凰

八世紀に入り、奈良時代ともなると、中国との交渉も盛んに行われるようになり、「鳳凰」の図像も、中国から直接もたらされてきたことであろう。それらを手本にして、我が国でも、バラエティーに富む「鳳凰」図像が描かれたのであろう。正倉院にみられる「鳳凰」はその一端を示すものと思われる。

以上、上代美術に描かれた「鳳凰」をみてきたが、中国でつくりだ

された「鳳凰」は、その特質とともに図像までもが我が国に強い影響を与えてきたことが理解できよう。

V

本論では、中国文化が産み出した「鳳凰」について、我が国がどのように捉えて受け入れてきたかという問題を考察してきた。

中国で今から三千年も前に考えだされていた「鳳凰」は、次第にその性質や形態を備えていき、およそ二千年前の漢代には、現在われわれが知るところの「鳳凰」の姿とほぼ同じものになっていたのである。つまり二千年の間、「鳳凰」は、中国文化の伝播とともに、近隣諸国に伝えられきたといえる。我が国における「鳳凰」も、その性質を始め、その形態までも、中国でつくりだされた「鳳凰」をそのまま踏襲してきており、日本独自の解釈というものはみられない。ここに強靱な中国文化の一面をみてとれる。

また、日本の上代美術にみられる「鳳凰」の図像も、中国文化との交流の中で伝えられ、描かれてきた。現存する「鳳凰」図像も少なくないのである。おそらく中国や朝鮮半島の国々から請求された図像を手本に制作されていたのであろう。

なお、今回は中国に伝わる「鳳凰」の図像には触れなかったが、我が国に強い影響を与えた中国の「鳳凰」図像の検討も必要となろう。さらに、日本の「鳳凰」図像も、八世紀までのものに留めたが、それ

以後も「鳳凰」は描かれたのであり、時代を下るにしたがってどのような展開をしてきたのかということも今後の課題としたい。

(本学講師＝芸術学担当)

註

- 註1 出石誠彦「鳳凰の由來について」(『支那神話傳説の研究』増補改訂版)所収 中央公論社 一九七三)
- 註2 『詩経』大雅、生民篇「鳳王于飛、翩翩其羽、亦集爰止、藹藹王多吉士、維君子使、媚于天子、鳳皇于飛、翩翩其羽、亦傳于天、藹藹王多吉人、維君子命、媚于庶人、鳳皇鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝朝陽、萃萃萋萋、離離喈喈」
- 『書経』益稷「蕭肅韶九成、鳳皇來儀」
- 『春秋左氏傳』莊公二十二年条「春陳人殺其大子御寇、陳公子完與顛孫奔齊……初懿氏卜妻敬仲、其妻占之曰吉、是謂鳳皇于飛、和鳴鏘鏘、有媯之後將育于姜五世、其昌竝于正卿」
- 註3 『淮南子』覽冥訓「鳳皇之翔至德也、雷霆不作、風雨不興」
- 『史記』五帝本紀「四海之内咸戴帝舜之功、于是禹之興九招之樂、致異物、鳳皇來翔、天下明德皆自虞帝始」
- 註4 前掲註2の『詩経』の記事参照。
- 註5 小杉一雄「龍」(『日本の文様 龍・麒麟・鳳凰』所収 光琳社出版 一九七七)
- 註6 杜而未『鳳麟龜龍考』(臺灣商務印書館 中華民國 五十五年年初版六十九年四版)所載の表を参考にして表を作成した。
- 註7 岡登貞治『新装普及版 文様の事典』「鳳凰文」(東京堂出版 一九八九)
- 註8 伊達宗泰『大三輪町穴師 珠城山二、三号墳』(奈良県文化財調査報告第三集 一九六〇)
- 註9 『斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書』(奈良県立橿原考古学研究所 編集 斑鳩町・斑鳩町教育委員会発行 便利堂制作 一九九〇)
- 註10 朝鮮半島における「鳳凰」図像については、別の機会に我が国の「鳳凰」図像と比較・検討のうえで論じたい。
- 註11 繡帳銘は、現存する天寿国繡帳には四文字しかないが、『上宮聖徳法王帝説』(平安時代成立)に全文が掲載されている。
- 註12 大橋一章「天寿国繡帳の原形」(『仏教芸術』一一七号 一九七八)また、天寿国繡帳については同氏の著書『聖徳太子への鎮魂 天寿国繡帳残照』(グラフ社 一九八七)に詳しい。
- 註13 神仙思想では、「鳳凰」は仙人の乗る鳥とされている。「鳳凰」に乗る仙人の図像は、法隆寺玉虫厨子の腰板絵にみられる。
- 註14 小杉氏前掲論文参照(前掲註5)。
- 註15 『平成三年 正倉院展目録』(奈良国立博物館発行)の解説に「雲に乗る鳳凰」とある。「雲」ということについては、疑問の点もあるが、ここでは一応『目録』の解説にしたがっておく。